



WARCRAFT

ウォークラフト

クリスティ・ゴールデン 著
定木 大介 訳

SB Creative

主要地名

アゼロス……………この物語の主舞台となる世界。

ストームウィンド……………人間たちの都市。レイン王が統治する。

ダララン……………大魔術師たちが住む空中浮遊都市。大魔術師の組織キリン・トアが管理する。キリン・トアの本拠である〈紫の砦〉もここにある。ストームウィンドのはるか北に位置する。

アイアンフォージ……………ドワーフたちの都市。ストームウィンドの北に位置する。

エルウィン・フォレスト
エルウィンの森……………水晶のような湖と広大な森からなる地域。ストームウィンドの南に位置する。

ブラックモラス
黒い湿地……………ストームウィンドのはるか南東に位置する湿地。オークたちが〈暗黒の門〉^{ダークポータル}を通じて、初めてアゼロスに現れる場所。

カラザン……………魔法に関する膨大な蔵書が保管されている塔。守護者メデイヴが住む。ストーム

ウィンドのはるか南東、〈黒い湿地〉の西に位置する。

ドラエナ……………オークたちの故郷だった場所。アゼロスとは異なる世界。オークたちは、ここから〈暗黒の門〉^{ダークポータル}を通じてアゼロスにたどり着く。

主要登場人物

■アライアンス……………人間を中心に、ドワーフ、エルフ、ノームが結集した連合。

ローサー……………ストームウインドの騎士。

レイン王……………ストームウインドの王で、ローサーの親友。

タリア……………レイン王の妻で、ローサーの妹。

メデイヴ……………大魔術師で、アゼロスの守護者。ローサー、レイン王と旧知の仲。

カドガー……………見習い魔術師。キリン・トア出身。

■ホード……………オークの各氏族が結束した集団。

デュロタン……………オークの戦士。フロストウルフ氏族の族長。

オーグリム……………オークの戦士。デュロタンとは旧知の仲。

ドウラカ……………デュロタンの妻。

グルダン……………オークの各氏族を集め、ホードを作った妖術師。
ウオーロアグ

ブラックハンド……………ブラックロック氏族の戦士。

ガローナ……………オークと人間の混血。



第一章

旅は長く過酷で、デュルコシユの息子であるガラッドの息子、デュロタンが予想だにしないほど辛酸をきわめた。

オークのフロストウルフ氏族は、妖術師^{ウオーロツク}グルダンの呼びかけにぎりぎりまで応じなかった氏族の一つだ。古い言い伝えでは、かつては流浪の生活を送る氏族だったとされるが、遠い昔ある族長が——氏族の民に対するのと同じくらい^{フロストファイアーリッジ}〈霜炎の尾根〉に対しても忠実だったある族長が——聖霊たちに請い、一つ所にとどまる許しを求めた。その願いは聞き届けられ、彼らの守り神とも言うべき「偉大なる父祖の山」の寿命に等しいほどの長きにわたり、フロストウルフ氏族は北にとどまり、さまざまな試練に見舞われながらも、孤高を保ち、誇り高く、かつたくましく生きてきたのである。

ところがその「偉大なる父祖の山」がぱっくりと割れ、そこから流れ出た液状の炎が村を襲ったとき、フロストウルフ氏族はふたたび流浪の民に戻ることを余儀なくされた。土地から土地へとさすらい、一カ所に腰を落ち着けることのない日々。しかし、彼らがそのような大きな苦難に見舞われているときでさえ、妖術師^{ウオーロツク}グルダン——自然のことわりに反した緑色の肌を持つ、猫背で、いかにも不気味な人物——は、デュロタンがほかに選択肢はないと見てついに首を縦に振るまで、二度

にわたってホード^{*}に加わるよう要請しなければならなかった。

グルダンは窮地に立たされたフロストウルフ氏族を訪ねてきて、あれこれと約束をした（デュロタンは断固として、それらをこの妖術師^{ウオーロップ}に守らせるつもりでいる）。そのときすでに、オークの故郷であり、地水火風^{ちすいかふう}および命の精霊たちの故郷でもあるドラエナーは、死に瀕していた。しかし、グルダンは新天地に心当たりがあるという。そこでなら、オークという誇り高い種族が肥え太った獲物を狩り、冷たく澄んだ水をたらふく飲み、自分たちらしく——つまり、情熱と誇りを胸に——生きることができるのだと。自分たちを取り巻く世界がそっくり萎^{しお}れて滅びゆくなか、絶望に打ちひしがれ、土埃^{つちぼこり}にまみれて地べたを這いまわらずともすむのだと。

にもかかわらず、今、この辛い旅路の最後の数マイルをとぼとぼ歩いているのは、まさに土埃にまみれ、打ちひしがれたフロストウルフ氏族にはかならなかった。デュロタンの氏族が北を進発してこの乾いた炎暑の土地にやってくるまでに、月の満ち欠けがとうに一巡してしまっている。その間、水にはほとんどありつけず、食べものを口にできる機会はさらに少なかった。かくも長大な距離を踏破する苦行に耐えられなかった者が、何人か命を落とした。この艱難^{かんなん}辛苦^{しんく}に果たしてそれだけの値打ちがあるのだろうか、とデュロタンは思った。どうかありますように、と精霊たちに祈る。しかしそれは、精霊たちがかろうじて聞き取れるほどの、あまりにも弱々しい祈りだった。

* 訳注 游牧民の群れを意味する言葉で、Warcathの世界でも本来はオークの集団を指すが、彼らがドラエナーからアゼロスに移住後は、アゼロスの在来種族も加わり、人間を中心とする組織アライアンスに敵対する一大勢力となる

歩を進めるデュロタンは、父親が死んだときに形見として譲り受けた武器を二つ携えていた。

一つは〈雷撃〉^{サンダー・ストライク}という名の槍で、ルーン文字が彫り込まれ、装飾がわりに革が巻いてある。柄の表面には、仕留めた獲物の数を示す切り込みが入れられている。水平の切り込みは獣の命を、垂直の切り込みはオークの命を示す。前者がほとんど柄の端から端まで覆うように刻まれているのに対し、後者は数えるほどしかなかった。

彼の父が使い、それ以前は父の父であるデュルコシユが使っていたもう一つの武器は、〈斬斧〉^{セバ}という斧だった。デュロタンはその刃を、鍛造したと変わらないくらい鋭利に保つことを心がけている。結果、この斧はその名に恥じぬどころか、それ以上の切れ味を発揮した。

デュロタン自身は徒歩^{かち}で旅を続けていた。自分よりも弱い者や病におかされた者が霜狼の背にまたがってついてこられるようにとの配慮だ。大柄で白い毛皮に覆われたこの狼たちは、騎獣として、また生涯の友として、フロストウルフ氏族に仕えている。デュロタンのかたわらをお股で歩くのは、副将のオーグリム・ドゥームハンマーだ。その広い褐色の背中には、ドゥームハンマーという姓の由来である巨大な武器が負われている。オーグリムはデュロタンを知り抜いているごくわずかな股^こ脇の一人であり、デュロタンが自分の命はもちろん、自分の妻やがて生まれてくるわが子の命さえ託せる腹心の一人だ。

戦士にして妻であり、近い将来母ともなるドウラカが、狼の〈氷〉^{アイス}にまたがり、デュロタンと並んで歩を進めている。旅の大半を、彼女は妻たる者にふさわしく夫と並んで歩いていたのだが、とうとうデュロタンから狼に乗ってくれと頼まれたのだ。「おまえのためだし、お腹の子供のためで

もあるが、たとえそうでなくとも、俺自身のためだ」とデュロタンは掻き口説いた。「おまえがいっつ倒れるかと、気が気ではないからな」

ドウラカは夫ににやりと笑ってみせた。下あごに生えた小ぶりな牙の上で唇がめくれあがり、黒い瞳がいたずらっぽく輝く。デュロタンが愛してやまない表情だ。「いいわ。言われた通りにしてあげる。わたしを狼に乗せようと一生懸命になるあまり、あなたが転んでしまったら元も子もないもの」

出立間もないころ、氏族は意気軒昂だった。レッド・ウォーカーズという恐るべき敵に遭遇し、これを倒しもした。しかし、彼らはそのとき、衰弱した精霊たちからの力添えはもはや期待できないことを思い知らされた。

デュロタンは氏族のみなに請け合った——自分たちはこの先もずっとフロストウルフ氏族のままだと。たとえホードのほかのオークたちと合流しても、それは変わらないのだと。肉、果物、水、澄んだ空気——喉から手が出るほど欲しいそれらを思い浮かべるだけで、励みになった。デュロタンの見たところ、問題は氏族全体が——じつを言うデュロタン自身も——苦難は遠からず去るだろうという樂觀的見通しを抱いて出発したことだった。結果、旅の過酷さによって、そういう甘い考えは粉々に打ち砕かれてしまった。

デュロタンは肩越しにふりかえり、みずから率いる氏族を眺めた。誰もが足を引きずって歩いている。大股で歩いている者など一人もない。そして、誰もがへとへとに疲れ切っている。そんな彼らの様子は、デュロタンにとって見るにしのびなかった。

妻の手が肩に置かれる柔らかい感触で、デュロタンの注意は彼女に引き戻された。無理に笑ってみせるが、笑顔に疲れがにじむのをどうすることもできない。

「どうやら狼に乗ったほうがいいのはわたしじゃなくてあなたのようなね」ドウラカは優しく言った。「いずれ、みんなが狼に乗れるだけの時間ができらるだろう。充分な肉が手に入り、腹をふくらせた狼たちが横で伸びをするようになったあかつきにはな」

ドウラカが自分の腹と夫の腹とを見比べ、いたずらっぽく目をほそめた。デュロタンは声を出して笑った。笑いかたすら忘れてしまったと思いかけていただけに、これは自分でも意外だった。ドウラカはいつだって夫をなだめるすべを知っている——笑いで、愛で、あるいは、ちゃんとさせるために時折こづいてくるこぶしで。そして二人のあいだにできた子供——

自分が〈霜炎の尾根^{フロスラフアイアリツジ}〉を捨てた本当の理由はそれだと、デュロタンにはわかっていた。ドウラカは氏族で唯一、身ごもっている。そして結局、子供に滋養を与えて育むこと^{はぐく}のできないような環境にわが子を——いや、オークの子供なら誰であれ——産み落とすことを正当化するいかなる方便も、デュロタンは見いだすことができなかったのだ。

デュロタンは手をのばし、いつもからかいの種にしている妻の腹に大きな茶色いてのひらを当て、そのなかに宿る小さな命の感触をたしかめた。旅立ちの前夜、自分が氏族のみなを前に語った言葉が、ちらっと心をかすめる。過去になされたことを伝承がどう語ろうと、また、諸種の儀式がわれわれにいかなる行動を求めようと、あるいは、どのような掟や法、伝統が存在しようと、決して背^{そむ}いてはならない法、ないがしろにしてはいけな伝統がある——それは、族長たる者、氏族のた

めに最善であることに疑いがないならば、どんなことでも実行しなければならないということだ。てのひらが立て続けに強く何度も押し返されるのを感じて、デュロタンはにつこり笑った。どうやらわが子も父の決断が正しかったと思ってくれているようだ。「この子ったら、もうあなたと並んで歩いているつもりなのよ」とドウラカが言う。

デュロタンが応える前に、誰かが大声で呼ばわった。「族長！ ありました！」

妻の腹を最後にもう一度撫でさすってから、デュロタンはカーヴォルシュに注意を向けた。一足先に出発させておいた斥候せっこうの一人だ。フロストウルフ氏族の大半は頭髪を伸ばしている。たんに、厳寒の北部ではそれが理にかなっているという理由からだ。だが、カーヴォルシュは、ほかの少ない者たち同様、いったん南部に入るとひと房の長い毛だけを残して（その房は紐で結わえてある）頭を剃りあげてしまった。そのカーヴォルシュの狼が今、デュロタンの前で足をとめ、暑さに舌をだらりと垂らしている。

デュロタンはカーヴォルシュに水の入った革袋をほうってやった。「まずは飲め。報告はそれからだ」。カーヴォルシュはいかにもうまそうに喉を鳴らして二口、三口飲んでから、革袋を族長に返した。

「地平線に沿って建物が並んでいるのを見ました」まだ息が整わないうちから、斥候は切り出した。「天幕です。われわれのと同じようなやつで、だけど数が半端じゃありません！ そのうちのいくつかから煙が立ちのぼってまして……つまり、煮焚きの煙がそれこそ何百本と見えました。それと、近づいてくるわれわれが見える位置に、物見やぐらがいくつか建ってます」信じられないというふ

うにかぶりを振るカーヴォルシュ。「ドラエナーのオークを一人残らず集めるっていうグルダンの言葉は、嘘じゃなかったんです」

自分でも気づいていなかった胸の重荷が、軽くなるのをデュロタンは感じた。自分たちは遅きに失したのではないか、それどころか、オークを糾合するきゆうごうというグルダンの言葉自体、大言壮語にすぎなかったのではないかという可能性について、デュロタンはあえて考えないようにしてきた。カーヴォルシュの知らせは、カーヴォルシュ本人が知る以上に、この疲れ切った族長にとって慰めになったのである。

「距離は？」

「陽の出ているときに歩いて半日というところです。夜にそなえてキャンプを設営しなけりやなりませんから、その時間を見込んで到着するようにすべきでしょう」

「たぶん、食事が用意されるだろうな」オーグリムが口をはさむ。「仕留めたばかりの獲物を串焼きにして出してくれるかもしれん。〈割れクレフトひづめフュー〉はこんな南までは来ないんだろ？ やつらみたいな南方人どもは何を食ってるんだろうな？」

「それがなんであろうと、仕留めたばかりの獲物を串焼きにしたものなら、おまえは食うに決まっているさ」とデュロタンが言った。「このキャンプで、食わずに遠慮する者なぞ誰もいない。だが、期待はしないでおう。期待はすれはごめんだからな」

「わたしたちは請われてホードに加わることにしたのよ」声のぬしはドゥラカだった。デュロタンの頭上からではなくかたわらでその声がしたのは、彼女がすでに狼の背を降りていたからだ。「わ

たしたちには槍から矢や戦鎚に至るまで、ふんだんな武器があるわ。それに、狩りの技能が身につけているし、生き延びるすべも知っている。わたしたちはホードに利益をもたらすために来たの。ホードの全員がたくましくなり、食べられるようになるのに役立つためにね。わたしたちはフロストウルフ氏族よ。わたしたちを迎え入れることができて、向こうは大喜びでしょう」

ドウラカの目はきらめき、その頤おしがいはわずかに上を向いている。彼女は一度、追放の憂き目に遭ったことがあった。まだ若く、ひ弱だったころのことだ。戻ってきたとき、ドウラカはデュロタンが知るかぎり最も猛々しい戦士の一人になっており、また、外の世界の文化や流儀に関する知識をフロストウルフ氏族にもたらした。それらが今、なおいつそう価値を増していることは疑いない。

「妻の言うことは正しい」と、デュロタンは言い、ドウラカをもう一度〈アイス〉の背にまたがらせようと仕向けたが、彼女に片手で拒まれた。

「もちろん彼女、は正しいわ」わずかに微笑みながらドウラカは同意する。「彼女、は夫と並んで歩き、一対の夫婦めおととしてホードのこの集会に入っていくでしょう」

デュロタンは南に目をやった。もう長いこと空は無慈悲に晴れ渡り、雨が降るような見込みはまるでなかった。しかし今、デュロタンの目には空に浮かぶ一朶いちだの灰色の雲が映っている。彼がそれをじっと見ていると、波のようにうねるその水蒸気の塊が、なんの前触れもなく、不吉な緑色に輝く稲妻によって不意に内側から照らされたのだった。

カーヴォルシュの見当は当たっていた。野営地にたどりつくころ、太陽はすでに地平線の近くま

で落ちていたが、それでも、彼らが夕食の支度をしたり、天幕を張ったりするにはまだ充分な明るさがあった。

これほど大勢ががやがやと話す声を聞くのは、デュロタンにとって馴染みのない経験だったし、見慣れない光景があまりにも多く、それらを眺めるだけで気疲れした。デュロタンは立ち並ぶ円形の大天幕——彼自身がドウラカと使うのと似たようなもの——にさっと視線を走らせ、それから異なる氏族の子供たちが一緒に遊ぶことがないよう、ロープで仕切られた野原の上で目を休ませた。そうしておいて、ありとあらゆる匂いと音を取り込む。話し声、笑い声、ロシツツド頌歌を歌う声に合わせた粗削りな演奏、太鼓が打ち鳴らされる音……。あまりにも多くの音が響いていて、デュロタンは足もとの地面が震えるのを感じ取ることができた。いっぽう匂いというと、火の香り、ケーキの焼ける匂い、肉を焼く炎の匂い、ぐつぐつ煮立っているシチュー、狼の毛皮とオークの体が発する強い不快ではない匂い……。これらがデュロタンの鼻孔をくすぐった。

カーヴォルシュの言ったことは誇張でなかった。むしろ、革と木でできた建物が無限とも思えるほどはるか彼方まで連なっているこの絶対的な広がり、最小に見積もっていたといえるぐらいだ。フロストウルフ氏族は氏族のなかでは最も小さな部類に属するし、そのことはデュロタンも承知していた。それでも、しばらくのあいだ彼は圧倒され、口をきくことができなかった。ややあつて、ようやく言葉が出てきた。

「オーグリムよ、これほど多くの氏族が一つ所に集まるとはな。ラフィング・スカル、ブラックロツク、ウォーソング……残らず召集されている」

「さぞかし強大な戦団になるだろうな」デュロタンの右腕は言った。「ただ、問題は逃げ出さずに戦うのは誰かということだ」

「フロストウルフ氏族の者よ」

そっけなく、ほとんど退屈しているかのようなその声のぬしは誰かと、デュロタンとオーグリムがこうべをめぐらすと、背が高くたくましい男性オーク二人が足並みをそろえて近づいてくるところだった。大地が死に瀕しており、多くの同胞が満足に食べられずにいる現下の状況を考えると、彼らは異様に大柄で、筋骨隆々としていた。鎖帷子や板金鎧など数えるほどしかなく、大半の者が^{びょう}鉾を打った革の防具で身を守らざるを得ないフロストウルフ氏族と違い、彼らは肩や、それどころか胸にさえも、凹みなどいっさいないびかびかの板金を当てていた。二人とも槍を携え、身のこなしはきびきびしている。

けれども、デュロタンの目をひいたのは、健康的で筋骨たくましい彼らの体格でもなければ、艶光りする真新しい防具でもなかった。

このオークたちの肌は、緑色だったのだ。

緑色といっても、微妙に緑がかっているだけで、ホードのリーダーであるグルダンのほとんど葉の色に近いそれに比べればるかに目立たない。ちなみに、グルダンが危険を賭して北にやってくる際に連れてきた奴隷のガローナもまた、主人と同じぐらい緑色の肌をしていた。それはともかく、目の前のオークたちの肌の色はその二人に比べればもっと暗く、オークの典型的な肌色である褐色により近かった。だが、自然のことわりに反した異様な色調は、厳然としてそこにあった。

「族長は誰だ？」緑色のオークの一人が訊ねた。

「フロストウルフ氏族を率いる榮譽を担うのはこの俺だ」重々しい声で答えながら、デュロタンが前に進み出る。質問したオークはデュロタンを頭のとっぺんからつま先まで値踏みするように見てから、オーグリムに同じような視線を向けた。「うぬら二人、ついてこい。ブラックハンドが会いたいと言っている」

「ブラックハンドというのは？」デュロタンが聞いたです。

すでに踵を返して歩きはじめていたオークの一人が足をとめ、向きなおり、にかつと笑った。なんとも醜い笑顔だ。

「おいおい、フロストウルフのひよっこよ」と、そのオークが答える。「ブラックハンドはホードのリーダーじゃないか！」

「でたらめを言うな」デュロタンがびしやりと言う。「ホードのリーダーはグルダンだ！」

「たしかに、俺たち全員をここに連れてきたのはグルダンだ」もう一人のオークが応じる。「俺たちをどうやって新天地へと導くか、そのすべてを知っているのがあの男だ。あの男は戦いでホードを率いる総大将にブラックハンドを選んだ。俺たちに仇なす敵を打ち負かすことができるようにな」

オーグリムとデュロタンは顔を見かわした。グルダンがデュロタンの父ガラッドに話を持ちかけてきたときも、デュロタン自身に話を持ってきたときも、この「新天地」をめぐる戦いについては一言もなかった。デュロタンはオークだし、オークである以上にフロストウルフ氏族の族長だ。氏族の民の——なかんずくまだ生まれていないわが子の——未来を確かなものにするために必要とあ

らば、相手が誰だろうと戦いをためらうつもりはない。それなのに、戦いのことをあらかじめ告げるのは適当でないとグルダンに判断されたことは、心外だった。

デュロタンとオークリムは幼いころからの付き合いで、お互いの考えがほとんど手に取るようにわかる。二人とも、今は黙りこくったままだった。

「うぬらが到着したときのために指示を残しておいたのはブラックハンドだ」最初にデュロタンに話しかけたオークが言い、嘲り^{あざけ}の表情とともに付け加えた。「^{フロストファイアーリッジ}霜炎の尾根」を離れる勇気がうぬらにあった場合にそなえてな」

「われわれの故郷はもう存在しない」デュロタンがそつげなく言った。「おまえたちの故郷がそうであるようにな——おまえたちの氏族名がなんであれ」

「俺たちはブラックロック氏族だ」もう一人のオークが誇らしげに言う。「グルダンからホードを率いる榮譽を与えるにふさわしいと見なされる前から、ブラックハンドは俺たちの族長だった。さあ、一緒に来い、フロストウルフ。女は来るにおよばない。俺たちに行方できるのは戦士だけだ」デュロタンが眉根を寄せ、辛辣な言葉でやり返そうとした矢先、うわべだけ穏やかなドウラカの声が聞こえてきた。「ブラックハンドには副将とお二人で会いにいつてくださいな、あなた。氏族の民はお帰りをお待ちしていますから」そう言つて、彼女は微笑んだ。

ドウラカは戦いどきを見誤らない女だ。彼女はあらゆる点においてデュロタン同様の戦士だが、身重の今、同胞と分かち合う食料よりも争いごとに飢えているように見える輩から、自分が相手にされないだろうことはわきまえていた。

「では、キャンプを張る場所をみつくりつつおいてくれ」とデュロタン。「俺はブラックロック氏のブラックハンドとやらに会ってこよう」

迎えにきた二人のオーク兵士に導かれ、デュロタンとオーグリムは野営地を横切っていった。はじめのうち、調理に使う器具や寝床がわりの毛皮に囲まれた子連れの家族ばかりが目に入るが、やがて、武器防具の洗浄や修理、製作に従事する、生傷のある、目つきが鋭いオークたちの姿が目につくようになった。鍛冶屋の天幕からは鎚音が響いてくる。石を鑿^{のみ}で削って車輪をこしらえている者もいれば、矢羽をつけたりナイフを研^といだりしている者もいる。誰もが二人のフロストウルフ氏族にちらちらと目を向けてくる。彼らの視線が、デュロタンの上であたかも実体を伴う何かのように閃^{めらめら}いた。

やがて、鋼と鋼が打ち合わされる戛^{かつぜん}然たる響きと、「ロクllタール・オガール!」という叫びがデュロタンの耳に届いた。勝利か、さもなくば死を、だと? いったい、何ごとだ? 案内役のオークたちを無視して、デュロタンは音のするほうに足を向けた。人混みをかき分けてたどりついた先は輪に囲まれた広大なエリアで、そこではオークたちが戦っていた。

今まさに、デュロタンが見ている前で、いかにも切れ味の鋭そうな二丁のナイフだけで武装したしなやかな体つきの女戦士が、星球鎖^{ミーンズ}棒を振りまわす男戦士のかいなをかくぐり、ナイフでその脇腹にふた筋の赤黒い線を刻み込んだ。一発できれいに仕留めるチャンスがあったにもかかわらず、彼女はそうしなかった。デュロタンはほかに視線を転じる。あるところでは四対一の乱闘が繰り広げられているかと思えば、ほかでは一対一の勝負が演じられている。

「訓練だ」デュロタンはやや緊張を解きながらオーグリムに言った。そして、眉根を寄せる。彼の目の前で訓練に汗を流しているオークたちのまるまる三分の一は、その褐色の肌が例によって鈍く緑がかったいた。

「うぬらがフロストウルフ氏族か？」デュロタンの背後で野太い声がとどろいた。「俺が期待したような化けもの集団ではないようだな」

デュロタンとオーグリムがふりかえると、そこにはデュロタンが見たこともないほど大きなオークが立っていた。デュロタンもオーグリムも小柄なほうではない。それどころかオーグリムなど、フロストウルフ氏族で何世代に一人出るか出ないかという巨漢だ。ところが目の前のオークは、デュロタンでも見あげなければならぬほど上背があった。そのオークの肌は真茶色で、少しも緑がかっておらず、汗か脂で光っていて、刺青で飾られている。巨大な両手は刺青の墨に覆われて真っ黒になっており、二人にひたと据えられた両目は品定めを面白がるかのように輝いていた。

「われわれが噂にたがわぬ氏族だということは、いずれわかるだろう」デュロタンは静かな口調で告げる。「われわれに勝る狩人が、今後おまえの新しいホードに加わることはなかるうさ、ブラックロック氏族のブラックハンドよ」

ブラックハンドは天を仰いで笑った。「俺たちに狩人など必要ない。必要なのは戦士だ。うぬらは先に来ているオークたちと対等に渡り合えるのか、ガラッドの息子デュロタンよ？」

デュロタンは先ほど不意をつかれてまだ血を流している例のオークにちらっと目をやり、「対等以上にな」と答えた。これは、はったりでもなんでもなかった。「それより、グルダンが——二度

にわたつて——われわれのもとを訪れ、ホードに加わるよう掻き口説いた際、その『約束の地』をめぐる戦いのことにはいっさい触れなかったぞ」

「ほう。だが、たんなる遠足のどこに楽しみがある？ 俺たちはオークだ。そして今や、ホードのオークとなった！ 俺たちはこの新天地を征服するだろう。少なくとも——」とブラックハンドは付け加える。「——俺たちのなかで、それを勝ち取るために戦うことを恐れない勇気の持ち主たちだな。うぬらは恐れておらんのだろうか？」

デュロタンはごくわずかな笑みをもらすことを自分に許した。下の牙の上で唇がめくれあがる。
「俺が恐れるのは、^か空約束だけだ」

「よく言った」ブラックハンドがうなずく。「無遠慮で悪くない。俺の軍におべつか使いの居場所はないからな。それにしてもフロストウルフ氏族よ、危ないところだったな。もう一度太陽がのぼれば、うぬらは間に合わなかったぞ。年寄りや弱い者たちと一緒に置いていかれたところだ」

デュロタンは眉根を寄せた。「二部を残していくつもりなのか？」

「最初はな。これはグルダンの指示だ」

デュロタンは自分の母親である〈語り部〉^{ロアキーパー}ゲイア、氏族で最高齢の巫術師^{シャーマン}ドレクⅡサル、子供ら、そして身重の妻を思い浮かべた。「そんな話に同意したおぼえはない！」

「文句があるなら、喜んでマクⅡゴラーの相手になろう」

マクⅡゴラーは古くから続く、すべてのオークに知られ、また実践されている伝統だ。それは名誉を懸けて戦う一対一の勝負であり、いっぼうが挑戦を突きつけ、他方がそれを受ければ成立する。

戦いは、どちらかが死ぬまで続けられる。数カ月前、デュロタンはマクIIゴラーで打ち負かした同じフロストウルフ氏族の朋輩にとどめを刺すことを拒んだ。このところ氏族の成員の数は減るいっぽうで、デュロタンはそのことを憂えたからだ。ブラックハンドには、そのようなためらいは微塵もなさそうだった。

「明日の夜明けとともに、グルダンの先導で、新たな故郷に向けて出発する」そうブラックハンドは告げた。「敵を掃討するこの第一陣は、戦士のみで構成されるだろう。ホードの精鋭部隊となるはずだ。うぬには氏族のなかでも若く健康で、敏捷かつ凶暴な者——つまりは選りすぐりの戦士たちを連れてきてもらうことになる」

デュロタンとオーグリムは目を見かわした。もしその新天地に危険がいくつもあり、それらが最も弱い同胞たちの脅威となるのであれば、ブラックハンドの言うことは戦略として正しい。強いものたちが先乗りすべきだ。

「おまえの言うことはもつともだ、ブラックハンド」しぶしぶ、デュロタンは認めた。「フロストウルフ氏族もそれに従おう」

「それは重畳^{ちゆうじよう}。うぬらフロストウルフ氏族は化けものには見えぬかもしれぬが、仮に始末しなければならぬにしても、まずは戦いぶりをこの目で見てからでなければ、興^{きよう}を削^そがれるからな。さあ、来るがいい。太平をむさぼるかの地に襲いかかるとき、オークが投入する兵力を見せてやろう」



第二章

デュロタンとオーグリムが戻るころには、すでに闇の帳とばりがおりていた。二人がいらないあいだ、氏族のみなはドウラカの指示のもと、旅で使う簡便な天幕の設営に精を出し、すでにその作業を終えていた。ひと張りひと張りの外には青地に氏族のシンボルである白狼をあしらったフロストウルフ氏族の紋章旗が掲げられ、風一つない乾いた空気の中力で力なくうなだれている。デュロタンはこうべをめぐらし、まさに天幕の海と呼ぶほかない光景を見わたした。自分たちの天幕のみならず、ほかの氏族の天幕も目に入る。他の氏族もやはり紋章旗を掲げているが、どれもくたびれて見え、まるでデュロタン自身が今感じている疲労感が映し出されているかのようなだった。

そのとき不意にそよ風が吹き、紋章旗をわずかにはためかせるとともに、肉を焼く香ばしい匂いをデュロタンの鼻孔に運んできた。彼はオーグリムの背中をぽんと叩いて言う。「明日、俺たちにどんな運命が降りかかるにせよ、今夜は食事にありつけるぞ!」

「俺の腹がさだめしありがたがるだろうよ」とオーグリムが応える。「野うさぎよりも大きな獲物を口にしたのはいつ以来だろうな?」

「さあ、思い出せん」いつとき高揚したデュロタンの気持ちは瞬またたく間まにしぼんでしまった。旅の

道中、獲物はむしろ凍てつく北部にいるときよりも少ないほどだった。肉の供給源は小型の齧歯類にほぼ限られた。デュロタンはタルバク——ガゼルに似た、繊細なくせに気性が荒い生きもの——を思い浮かべた。そして、巨大な〈割れひづめ〉^{クレフトフープ}も。後者を仕留めるのは簡単ではないが、成功すれば氏族全員の腹を満たすことができた。この砂漠で、グルダンは果たしてどんな種類の野生動物を見つけたのだろうか？ ふとそんな疑問が浮かんだものの、デュロタンは答えをあえて知りたいとは思わなかった。

氏族のキャンプに近づくと、デュロタンとオーグリムは二人を歓迎するかのような笑い声に迎えられた。デュロタンはそのままずんずん歩いてゆき、いくつか焚かれていた焚き火の一つを囲むように座っているドウラカ、ゲイア、それにドレク・サールを見つけた。この三人は、オーグリム・ドウムハンマーとともにデュロタンの幕僚会議を構成している。彼らはいつもの確かな助言をしてくれる。それだけに、ブラックハンドの命令を思い出すと、デュロタンは怒りが込みあげるのを感じた。刺青で体を覆ったあの総大将が自分のしたいようにするなら、オーグリム以外の「幕僚」は全員あとに残ることを余儀なくされる。同胞たちは家族ごとに小さな焚き火を囲み、その近くではくたびれ果てた子供らがうたた寝をしていた。しかし、彼らの腹は何カ月ぶりかでありつけたまもな食事でふくれており、それがデュロタンには嬉しかった。

焚き火の中央には、小動物を刺した焼き串が何本か立っていた。デュロタンはオーグリムを悲しげに見やった。どうやらフロストウルフ氏族は依然として、自分たちのこぼしほどの大きさしかない動物で腹を満たさなければならぬらしい。だが、それでも肉は肉に変わりないし、しかも新鮮

だったから、デュロタンは不満を口にするつもりはなかった。

ドウラカが火のなかから肉のついた焼き串を一本とり、手渡してくれる。デュロタンはそれに勢いよくかぶりついた。肉はまだ熱く、舌が火傷やけどしそうなほどだったが、彼は意に介さなかった。新鮮な肉を口にするのがいつ以来かさえ、デュロタンにはわからなかった。激しい飢えがとりあえず満たされ、人心地ついたところで、デュロタンはオーグリムと二人で見聞きしたことを仲間に話し、ブラックハンドに言われたことを彼らに伝えた。しばらくのあいだ、座は沈黙に包まれた。

「誰を連れていきなさる？」ドレクⅡサールが静かな口調で訊ねる。オーグリムは視線をそらした。族長でなくてよかった、こういう悪い知らせを伝える役どころでなくてほっとしている——デュロタンの友人の顔にはそう書いてあった。

デュロタンはブラックハンドとの会見を終えてオーグリムと帰途について以来、頭のなかでリストアップしていた者たちの名前を挙げていった。ドウラカもゲイアもドレクⅡサールも、そのなかには入っていない。長い沈黙が続き、やがてようやくゲイアが口をひらいた。

「異論は唱おほなえますまい、息子どの。わたしは留守居を務めましょう。ドレクⅡサールとともに〈命の精霊〉の訪いを受けたとき、わたしはお告げを受けたのです——いづれ氏族とともにとどまる必要が出てこよう、と。今、その意味がわかりました。わたしは巫術師シャーマンで、腕におぼえもあります、わたしよりも若く、強健で、なおかつすばやい者がほかにいます。それに、わたしは〈語り部ロッキンバ〉でもあります。そなたには精霊たちのご加護があるとはいえ、万一この先遣隊が全滅しても、少なくともわが氏族の歴史は語り継がれるでしょう」

デュロタンは感謝の気持ちを込めてゲイアに微笑んだ。すっかりわきまえているような物言いをしているが、彼女がどれほど息子のかたわらでともに戦いたいと思っているか、デュロタンには痛いほどわかったからだ。「かたじけない、母者^{ははじや}。言うまでもないが、安全が確保できしだい、みなを迎えに戻ってくるつもりだ」

「わしにも否やはありませんぬ」ドレクⅡサールの声にはうつすらと哀しみがにじんでいた。盲いた両目を隠すためにいつも顔に巻いている布を指し示し、この老巫術師^{シャーマン}は続ける。「わしは目が見えぬし、年寄りじゃ。ついていけば、きっと足手まといになりますよ」

「待って」硬い声でドウラカが言う。「あなた、ドレクⅡサールを置いていくというのは、考えなおしてちょうだい。彼は巫術師^{シャーマン}よ。そして精霊たちからはお告げがあったわ——わたしたちが今から足を踏み入れようとしているその世界には、自分たちも顔をそろえるだろうって。そこに地水火風と命が存在するかぎり、あなたには巫術師^{シャーマン}が必要になるわ。ドレクⅡサールはフロストウルフ氏族最高の巫術師^{シャーマン}で、おまけに治療師^{ヒーラー}でもある。それに——とドウラカは付け加える。「あなたには彼の予知夢が必要になるでしょう」

デュロタンの腕の肌が粟立った。ドレクⅡサールの予知夢が仲間の命を救ったことは一度ではきかない。《火の精霊》の警告のおかげで、氏族全体が難を逃れたこともあった。そんなドレクⅡサールを、なぜ置いていけるというのか。「そなたは戦ってはならん」とデュロタンは言った。「傷を癒し、助言をするだけだ。約束できるか？」

「喜んで、族長。お供できるだけでも名誉なことですよ」

デュロタンはドウラカに向きなあった。「おまえが戦えることはわかっている。しかし——」彼は言葉を切ると、さっと立ちあがった。片手は「斬斧」の柄に伸びている。

やってきたのは、ブラックハンドに劣らぬほどの巨漢だった。まるで石から鑿^{たがね}り出したかのようなたくましい体が、火明かりで陰影を帯びている。ブラックハンドの堂々たる体格にもデュロタンは感心させられたが、このオークは——仮にブラックハンドほど大きくはないとしても——筋肉の量と見た目の屈強さでブラックロック氏族の族長をしのいでいた。ブラックハンド同様、このオークも刺青を施している。ただし、墨で真っ黒になっていたのがホードの総大将の両手であるのに対し、このオークの場合、真夜中のように黒く染まっているのはあごだった。長い黒髪は後ろに撫でつけられて鬘^{まげ}に結われ、両の瞳は火影^{ほかげ}を映して爛々と輝いている。

「俺はグロム・ヘルスクリーム。ウォーソング氏族の族長だ」オークはそう言つて、野営地の新参者たちを眺めわたした。「ようやくフロストウルフ氏族がやってきたとブラックハンドに聞いてな」グロムは低い声でさも愉快そうに言つてから、何かの袋をデュロタンの足もとにほうった。「差し入れた」

袋はもぞもぞと動き、あちこちが膨らんでいる。「虫だよ」とグロム。「生きたまま、火を通さずに食うのが最高におつなんだ」そう言つてにやりと笑う。「さもないや、干してすりつぶすか。それでも味は悪くないぞ」

「俺はデュロタン。デュルコシユの息子ガラッドの息子だ。ウォーソング氏族の族長グロム・ヘルスクリームよ、おまえをわが氏族の焚き火に歓迎しよう」

デュロタンは焚き火のまわりに集まっている面々を紹介しないことにした。へたに興味を持たれても困る。日の出とともにドレクⅡサールを連れていくつもりなら、なおのことそれは避けたい。デュロタンがドウラカに目配せすると、彼女はうなずいて立ちあがり、ドレクⅡサールとゲイアの肩にそっと手を置いて、別の焚き火に二人を導いていった。

デュロタンが空席を示すと、グロムは彼とオーグリムのあいだに腰をおろした。残り火から引き抜いて勧められた焼き串を受け取り、肉汁がしたたる肉にさもうまそうにかぶりつく。

「お初にお目にかかるが」とデュロタンが言う。「おまえの氏族の幾人か^{いくたり}が、わが氏族の仲間たちと狩りをともしたことがある。もう何年も前のことだが」

「氏族の連中が言っていたのを憶えているぞ。フロストウルフ氏族はよい狩人だと。そして公正でもあると」グロムが認めた。「ただ少々……」そこで言葉を探す。「……控えめに過ぎるとも」

デュロタンはフロストウルフ氏族がウォーソング氏族から受けた印象をグロムに話すのはやめておいた。その話題になるとフロストウルフ氏族では、「衝動的」だの「騒々しい」だの「気性が荒い」だの「イカレてる」といった言葉が飛び交った。そうした言葉が賞賛の意味で使われることも確かにあったが、いつも必ずそうだとは限らなかった。そこでデュロタンはかわりにこう応じた。

「どうやらグルダンはずでに全氏族を^{きめりょうしう}糾合することに成功したようだな」

グロムはうなずいた。「最後に加わったのがおまえたちだ。もう一つ別な氏族がいたが、この連中はいなくなった。グルダンによればな」

フロストウルフ氏族の二人は居心地悪そうに身じろぎをした。グロムはレッド・ウォーカーズの

ことを言っているのだろうか？　もし本当にあの氏族が一人残らず死に絶えてしまったのだとしたら、それは喜ぶべきことだし、デュロタンに彼らを悼むつもりは毛頭なかった。

「われわれは」と、グロムが誇らしげに言う。「真つ先に馳せ参じた氏族の一つだ。グルダンがやってきて、狩りの獲物と澄んだ水と戦う相手に不自由しない新天地に旅するすべを知っていると云って移住を持ちかけてきたとき、俺たちは二つ返事で承知した」そこでからからと笑う。「それ以上、オークが何を望むというんだ？」

「到着早々、俺は副将のオーグリムとともにブラックハンドに会った」デュロタンが言う。「ブラックハンドが戦士で構成される第一陣を率いてその新天地とやらの先乗りすると聞かされ、武器やそれをふるう者たちについて話した。だが俺は、グルダンがどのような準備をしているかに興味がある」

グロムはまた肉にかぶりつき、そのままたいらげてしまうと、焼き串を焚き火のなかにほうった。「グルダンは俺たちが向こうの世界に渡る方法を見いだした。ものは大昔の遺物でな。長いあいだ地中に埋もれていた。グルダンが魔法でそのありかを突きとめ、俺たちは到着と同時に発掘を始めた。ようやくそれを掘り出すことに成功し、明日、それを使う運びになったというわけだ」

デュロタンが両の眉を吊りあげた。「それは地面にあいた穴なのか？」

「じきに現物が見られるさ」

内容を知れば知るほど、デュロタンは計画が気に入らなくなってきた。「死出の旅になりそうに聞こえるが」

「心配するな」とグロムが請け合う。「しいて言うなら、われわれオークの民の再生だな。新天地への旅路さ!」

「それを信じているのか?」オーグリムが訊ねた。希望よりは懷疑がまさった口調だ。

グロムはオーグリムをいつとき見つめた。それから力強い片腕を上げて前に身を乗り出し、その腕を焚き火の炎に近づけた。火明かりに照らされ、それまで暗くてよく見えなかったものが、デュロタンにも見えるようになる。訓練に励んでいるところをオーグリムと一緒に見た連中——あの大勢のオーク同様、グロム・ヘルスクリームの肌もまた、緑がかった。そしてグロムが口をひらいたとき、その言葉はデュロタンではなくオーグリムに向けられていた。

「俺はグルダンを信じている。フェルを信じている。あの男があやつる死の魔法が、俺を強くしてくれた」グロムが腕を曲げると、メロンほども大きな力こぶが盛りあがった。「おまえたちにもいずれわかる。それこそ五人力の強さを感じるようになるだろう」

「ブラックハンドはそんなものに頼らずとも充分強そうだがな」デュロタンがずけずけと言った。

グロムの明るい双眸そうぼうがさつとフロストウルフ氏族の族長に向けられる。「もつと強くなれる余地があるというのに、なぜ充分強いなどと言える?」下あごの牙から唇がめくれあがり、荒々しくも禍々まがまがしい笑顔をつくる。ウォーソング氏族が満足するほど「もつと強く」が「充分強い」になることなど、果たしてあるのだろうか——デュロタンはそう訝いふからずにはいられなかった。

デュロタンが自分の天幕に引きあげてくるころ、ドウラカはすでに北部から持ってきた毛皮の上

に身を横たえ、寝息をたてていた。

本来であれば、ドウラカは分厚く暖かい〈割れひづめ〉の皮を何枚も重ね、その上で体を休めているはずだったし、彼女の住まいはすなわち族長の住まい——木と石でできた頑丈でどっしりした建物——であるはずだった。本来であれば彼女は、戦士の魂だけでなく小さな生命——彼女の腹に丸みを帯びさせ、筋肉質な体のなかで唯一柔らかな部分たらしめている存在——をも宿すその母体を養うための、良質で体に良い食べものに不自由していないはずだった。それが今、彼女の体を硬い岩から隔てるのはうさぎの毛皮のみであり、しかも、氏族は最後の数リーグをまったく食べものにありつけないまま歩いてきたのだった。

ゲイアはデュロタンとドウラカに、〈霜炎の尾根〉フロストファイアーリッジから持てるだけのものを持つていくべきだと言

言ってきた。氏族の伝統を思い出すがにすするためだ、と。だから、この仮住まい——ほかの大半の住まいよりはいくらか堅牢な造りだった——にはフロストウルフの紋章が飾られ、武運を上げ危険を祓うことを念じて巫術師がこしらえ、祝福した装飾的な区画がいくつも設けられていた。そのなかには、さまざまな武器がすぐ手の届く位置に置かれている。槍、斧、戦鎚、戦棍、弓矢、刀剣……そしてもちろん、〈雷撃〉サンダーボルトも。デュロタンは身に帯びていた〈斬斧〉セバをはずして毛皮の横に置くと、腰をおろして妻を眺めた。

長い黒髪。荒々しくも力強い面立ち。膨らんだ腹部……横向きになって、すやすやと寝息をたてている妻の体に視線を遊ばせているうちに、デュロタンは優しい気持ちに包まれるのを感じた。そのドウラカが、目をつぶったまま片手を伸ばしてデュロタンに触れてきた。

「あなたの視線を感じるわ」低くかすれたドウラカの声には、愛情と茶目っ気の入り混じったぬくもりがある。

「眠っているものとばかり思っていたぞ」

「眠っていたわ」ドウラカは身重の体を仰向けにし、心地よい姿勢を探したが、見つからなかった。夫の手がお腹に伸びてくる。ほとんどすっぽり腹を覆うほどに大きい指とてのひらが、言葉を使わずにわが子と通じ合っていた。「雪のなかで狩りをしている夢を見ていたの」とドウラカが言う。

デュロタンは目を閉じてため息をついた。あの慣れ親しんだ、身を切るような冬の寒さ——生き延びようとあがく獲物に襲いかかるとき、自分たちの肉体に挑んでくるあの冷気——を思い出すのはかえってつらく、ほとんど苦痛に近かった。叫び声、新鮮な血の匂い、滋養満点の肉の味……。なんとすばらしい月日だったことか。デュロタンは妻の隣で毛皮の上に身を横たえ、ドウラカが追放から戻ってきた夜のことを思い出した。デュロタンは旅の土産話を聞かせるとせがみ、二人は今そうしているように隣り合って仰向けに寝た。だが、お互いに指一本触れなかった。二人はただ、星々を見あげ、立ちのぼる煙を眺めていた。

それでも、あのときのデュロタンは満ち足りていた。「名前を思いついたの」と、ドウラカが続ける。

デュロタンはうなり声をもらした。つい感傷に^{ひた}浸ってしまった自分自身に腹が立ったのだ。ドウ

* 訳注 リーグ…距離の単位。4.8 km

ラカの見た夢は本物の、自然な夢だ。未練がましく、わざわざ思い出そうとして呼び起こす記憶とはわけが違ふ。デュロタンが懐かしむ日々は去り、もう二度と戻ってはこないのだ。

彼はドウラカの手をとり、からかうように言った。「まあそれは自分の胸にしまっておくがいい、妻よ。俺は対面してから名前を選ぶつもりだ、それが息子にせよ……娘にせよな」

「へえ」ドウラカの声には面白がっているような響きがある。「わたしが一緒に行かないのに、偉大なるデュロタンはどうやって息子に名前をつけるつもりかしら？」

「息子と言ったか？」デュロタンは片方の肘をついて身を起こし、口を半開きにして妻を見つめた。息子が娘を授かるだろうことは、常日頃から意識していた。赤子が五体満足で生まれてくることに比べれば、性別など大した問題ではない。フロストウルフ氏族の女たちはみな、猛々しい戦士だ。ドウラカを見ればよくわかる。ただ、伝統により、氏族の族長の地位は男性のみが引き継ぐことに決まっている。デュロタンはまばたきをして妻を見た。「おまえはドレク＝サールのように予知夢が見えるようになったのか？」

ドウラカは微笑んで肩をすくめた。「まさか。ただ……感じるだけ」

デュロタンはあの最初の夜のことをまた思い浮かべた。そして、それ以来二人で共有した幾多の夜のことを。お互いがいない夜を幾晩も過ごすことなど、デュロタンは考えたくもなかった。父親が立ち会わない場で自分の息子が生まれることなど、想像したくもなかった。

「その膨れた腹を、隠すことはできるか？」言い返されるのを予想して、にやりと笑いながらデュロタンは訊ねた。

夫をとことん知り尽くしているドウラカは、デュロタンの肩をこづいた――愛おしげに、しかし相当に強く。「あなたがその足りないおつむを隠すよりはうまく隠せますとも」

デュロタンは心の底から笑い、それでずいぶん気が晴れた。妻も一緒になって笑う。二人はまた横になり、デュロタンの手がもう一度自分たちの息子を守るように置かれた。（俺たちは親子三人、そろって新天地を踏むのだ）

たえ何があろうと。



第三章

翌朝、牙のような突起物で飾られた小型の丸盾^{ラウンドシールド}を腹部に当てて紐でくくりつけていたドウラカは、夫の視線に気づいた。デュロタンは軽くうなずいてみせ、妻を少しでも勇気づけてやる。おまえなら、膨らんだ腹を隠すことと、まだ生まれてこない自分たちの息子を守ることを両立できる、と。ここ数年は厳しい状況が続き、ドウラカは少しも体重を増やすことができなかった。特に身ごもってからは、わずかでも余分があれば、それらはすべて成長中の胎児に直接取り込まれたからだ。だから、腹部さえ覆い隠してしまえば、筋肉が落ちて脂肪がついたとか、顔が丸くなったとか、妊娠を示すそういった徴^{しるし}がドウラカには一つもない。それが今はかえって好都合なわけだが、デュロタンは妻にそれほどひどい思いをさせてきたことに、痛いほどの後悔をおぼえた。

ドレクⅡサルはマントの頭巾を目深にかぶり、白い髪と、醜く損なわれた顔を覆う布とを隠した。長年彼の世話をしている同じ巫術師^{シヤーマ}のパルカーが、この老人を介助することになっている。すでに集合し、「地面の穴」に向けて進めとの号令を待っている二人に、デュロタンは近づいていた。

「おまえたちの正体がばれないとは約束できない」と彼は正直に言う。「もしそんな危ない橋は渡

れないというのであれば、そう言ってくれ。誰も責めはしない」

「承知しておりますとも」ドレクサーは答えた。「すべては精霊たちの思し召しのまま」

デュロタンはうなずいた。すでにゲイアと別れの挨拶をすませたドウラカが、脇にのく。デュロタンは母親の両肩に手を置いた。「オーグリムと俺がいないあいだ、ははじや母者に氏族を率いてもらうことになる。（語り部）」以上に、氏族の運命をゆだねるにふさわしい相手を思い浮かべることはできないのでな」

ゲイアは涙ぐんでなごいなかった。彼女はすつくと立ち、力強く、堂々としている。「命にかえても仲間を守る覚悟ですよ、息子どの。そしてそなたが戻ってきたら、わたしたちは喜んでそなたとともにその緑豊かな新天地へと向かいましょうぞ」

デュロタンたちが戻ってこれないかもしれないことは、誰もが知っていた。なにしろ、その約束の地とやらに關しては、わからないことが多すぎるのだ。彼らは魔法によってその地に渡ることになっているが、そこで何が待ちかまえているかは、グルダンから聞かされていることを除けば、皆目見当がつかない。もしグルダンが間違っていたら？ もし彼が嘘をついていたら？ もしそこに、オークでさえ対峙できないほど途方もない危険が存在するとしたら？ もつとも、だからといってどうすることもできない。ここで生きていくことは、どのみち耐えがたいからだ。

「きつと、あつけなく征服できると思う」デュロタンは言い、声が上がっていないことを祈った。

とそのとき、角笛が鳴り響いた。召集の合図だ。デュロタンはゲイアを抱きしめる。ゲイアは少しのあいだ息子にしがみついてから体を離し、後ろにさがった。デュロタンは氏族の面々を眺めわ

たす。子供たちに大人たち。居残る成人の男女は戦士ではなく、職人や巫術師シャーマンばかりだ。彼らのために打てる手はすべて打った。

今は、グルダンの言葉が信用できるものかどうかを確かめるときだ。

ブラックハンド配下のオークたちが彼らを誘導し、いくつもの氏族を一つの流れに合流させている。褐色の肌と緑色の肌が混じり合い、ギラギラ輝く鋼鉄とくすんだ白い骨とが、砂埃のなか、下り勾配をゆつくりとくだってゆく。またしても、デュロタンは驚嘆を禁じ得なかった。これほど大勢のオークが一つの目的でまとまり、肩を並べて行進しているのだ。身の内で希望が膨らんでくる。自分たちはオークだ！ できないことなどあるだろうか？ たとえ行く手にどんな生きものが待ち受けていようと、そいつらは駆けまわる足に踏みしだかれ、振りまわされる武器の鏑となり、クロクニター・オガール！ の叫びを聞きながら屠ほふられるのだ。

ドウラカを見やると、彼女は笑顔を向けてきた。一度だけぎゅつとデュロタンの手を握り、すぐに離す。誰も彼女に見向きもしない。《雷撃》サダーストライクを手に持ち、《斬斧》セバーを紐で背中にくくりつけたデュロタンは、大股でずんずん歩を進めた。

ブラックハンド配下のオークの一人が列に伴走し、号令をかける。「右に曲がれ！」デュロタンとドウラカはその声に従った。

そして、それはそこにあった。

「ヘルスクリームの言ったことは嘘じゃなかった」デュロタンがつぶやく。「地面にあいたただの穴とは違う」

著者

クリスティ・ゴールデン (Christie Golden)

著名な賞の受賞者であり、ニューヨーク・タイムズ紙のベストセラー・リストに八度も名を連ねたクリスティ・ゴールデンは、SFやファンタジーやホラーの分野で四十を超える長編といくつかの短編を発表している。代表作に、『スタートレック』の世界を描く一ダースを超える長編小説、大手ゲーム開発会社ブリザード・エンターテインメントの二大タイトル World of Warcraft および「スタークラフト」を題材にした一ダース近い長編小説、それに、『スター・ウォーズ』の小説シリーズ Fate of the Jedi などがある (Fate of the Jedi はアーロン・オールストン、トロイ・デニングの二人との共作で、ゴールデンはシリーズ九編中、三編を担当している)。

ジョージア州生まれ。ミシガン、バーモント、コロラドの各州を転々としたのち南部に戻り、現在はテネシー州に暮らす。

ツイッターのアカウントは @ChristieGolden。ウェブサイトの URL は www.christiegolden.com。

訳者

定木 大介 (さだき だいすけ)

翻訳家。訳書に『苦悩のオレンジ、狂気のブルー』デイヴィッド・マレル (柏檜舎)、『絨首人の一ダース』デイヴィッド・アリグザンダー (論創社)、『百年祭の殺人』マックス・アフォード (論創社) があるほか、ビデオゲームに加え、ダンジョンズ&ドラゴンズやウォーハンマー等、TRPG (テーブルトーク・ロールプレイングゲーム) の翻訳も数多く手がける。

ウォークラフト

2016年 7月 1日 初 版 第 1 刷発行

著 者 クリスティ・ゴールデン

訳 者 さだき だいすけ
定木 大介

発 行 者 小川 淳

発 行 所 SB クリエイティブ株式会社
〒106-0032 東京都港区六本木 2-4-5
TEL : 03-5549-1201 (営業部)
<http://www.sbcr.jp/>

組 版 編集マッハ

印 刷 株式会社シナノパブリッシングプレス

編 集 担 当 品田洋介

カバーデザイン 渡辺 縁

校閲 聚珍社

協力 東宝東和株式会社

落丁本、乱丁本は小社営業部にてお取り替えいたします。定価はカバーに記載されております。本書の内容に関するご質問等は、小社まで必ず書面にてご連絡いただきますようお願いいたします。